

『旧倫理』

問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図、解答結果及び自己評価等

問題作成部会では、上記の作成方針にもとづいて、現代の高校生が、日常的に直面する具体的な倫理的諸課題を、教科書で学ぶ先哲の知見と関係づけて批判的に吟味する力、そして原典資料や科学的データを適切に読み取りそれにもとづいて考察する力を評価できるような問題作成に努めた。

第1問は、快樂と人間の理想的な生き方を主要テーマとして、生き方をめぐる源流思想についての考えを深める問題を設けた。設問では、快樂や欲求をめぐる古代の思想家たちの教科書知識の理解力の質と、関連資料の読解を通じた知識の活用力を問うた。さらに、レポート課題の思考実験を通して自分の生き方を見直すという場面を設定し、先哲の思想を応用して人間の理想的在り方を考えてもらうことを意図した。

問1は、人間の望み・欲望について、異なる哲学・宗教思想を横断する知識問題であった。正答率が低く（22.36%）、難問となった。荀子の誤った記述を正として選ぶという誤答が目立ったが、荀子に関する用語が並んでいるのを見て正しいと判断したと推測される。荀子の思想内容を理解していれば明らかに誤りであると判断できる問題であった。

問2では、仏教の四苦について、単なる語の知識を超えた、内容の正確な理解を問うた。正答率は標準的で、成績上位層と下位層の正答率の差が大きく、識別力の高い問題であった。

問3では、キリスト教の伝統における原罪思想の知識を旧約からアウグスティヌスに至るまで幅広く問うことができた問題である。正答率も標準的で、識別力のある問題であった。

問4では、エピクロスとブッダの知識を前提にしつつ、両者の資料を正確に読解して、比較する力を問うた。一見相似した両思想について、原文読解を通して精緻に理解し、共通点・相違点の正確な把握を促すことができる問題になった。

問5では、人間の理想的な生き方について、異なる哲学・宗教思想についての知識を問うた。正答率が低く（36.36%）、難問となった。正答選択肢のプロティノスについては教科書の記述が薄い、ブッダ、荘子、キリスト教の選択肢は、基本的な知識に基づいて明らかに誤答であると判別できるものであった。

問6では、クルアーンについての知識と、現世の享樂と来世の快樂についてのクルアーン章句の記載の理解を問うた。クルアーンについての理解が不十分なことによる誤りが多く見られ、一定の識別力があつた。

問7では、孔子の言葉を解説する資料の記述と儒学の基本的な用語に関する知識を結びつける応用力と、資料を読み解く理解力を問うた。資料中に「忠」と「恕」を解説して用いられた語句「真心」「私心」への理解の差が、成績上位層と下位層の正答率の差に反映され、識別力の高い問題とな

った。

問8では、リード文の論旨を踏まえて、問8の会話文の展開と登場人物の学びに合致する記述を選択する論理的思考力を問うた。成績上位層と下位層の正答率の差が大きく、内容を理解できているかを問うことができる識別力の高い問題となった。

第1問全体の正答率は47.79%で、昨年度の58.87%にくらべ、難度が上がったと言える。正答率が低かった問題は、主に異なる地域や宗教の思想を一つのテーマに関して比較して問うたものであった。このことから、源流思想を横断しながら、相互の類似点や相違点を比較・考察する思考力が十分に身につけていないことがうかがえる。

第2問は、私たちの日常生活の中でも特に重要な営みで、日本思想にも通底する「食」をテーマに、自己と他者（他の人々、生命）との間にある食を介した関係の自覚と、その在り方に対する反省に至る過程を通じて、日本思想の知識、資料読解力、様々な倫理的課題への論理的思考力を問うた。特に、テーマに関連の深い資料を一貫して出題し、食の意味や倫理についての気づきと反省を促した点が特徴である。

問1では、近代日本の民衆の生活や社会に向き合った思想家に関する知識と理解を問うた。出題の形式・内容ともにオーソドックスで正答率も標準的であった。

問2では、古代日本の思想における神々や天地の成り立ちに関する知識と理解を問うた。解答傾向から、キリスト教的な究極神・創造神と、日本神話特有の神観を混同した誤りが目立った。

問3では、資料(安藤昌益『統道真伝』)の読解と安藤昌益に関する知識をもとに、昌益の自然観と社会観の連関を捉える思考力を問うた。食の思想家としての安藤昌益にスポットを当てることも意図の一つであった。資料の意味が読み取れていても、「法世」など昌益の社会観に関する基礎知識が不十分なために、正解できない傾向が一定程度見られた。

問4では、茶道の思想に関する資料(『南方録』)に基づき、日本の美意識に関する捉え方について読解する力を問うた。また、茶道を題材に、日本の美意識と食事作法等の日常とを結び付ける視点を示すことも意図の一つである。資料は内容にややひねりのあるものだったが、正答率は高めだった。

問5では、平安時代(空海)と鎌倉時代(道元・法然・親鸞)の仏教思想に関する知識と理解を問うた。また、ノート穴埋め形式とすることで、日本仏教における肉食の扱いを通じて食の意味や倫理を考えさせることも意図した。臨済禅と曹洞禅の違いを十分に理解できていない誤りが目立った。

問6では貝原益軒に関する知識と理解を問うた。正答率がやや低く、また益軒と他の思想家との混同による誤答が目立つ。益軒に関する知識と理解が定着していない実態がうかがえるが、益軒はどの教科書でも採択されており、これを機にもう少し注目されてよい。

問7では資料(宮沢賢治『ビヂテリアン大祭』)に基づき、宮沢賢治における自己と他の生命の関係に関する捉え方について読解する力を問うた。現代のヴィーガニズムとはまた異なる食の倫理の形にスポットを当てることも意図の一つである。資料の文体、内容には若干癖があるものの、正答率は高めだった。

問8では資料(柳田国男『明治大正史 世相篇』)における「食」の捉え方の読解と、会話をふまえて全体を振り返って考察する論理的思考力を問うた。正答率は標準的だが、会話は理解できていたものの資料文中の単純な前後関係を誤読した誤答が目立った。

以上、第2問全体の正答率は58.7%。資料問題(問3, 4, 7, 8)の正答率が高めで、知識問題の正答率が低めだった。なお、資料は、いずれも食の意味や倫理について気づきや反省を促し、かつ現代欧米のフードエシックスにない多角的・批判的な視点を提示することを意図した。今後、教科書や教育現場でも、このような資料を積極的に活用してほしい。

第3問のテーマは、「労働の意味」である。労働に関する西洋近現代思想についての会話文や資料、およびそれに関連する議論を通じて、労働に関連する知識や倫理的課題についての思考力・判断力を問い、労働が社会の中でどのような意味を持つのかについて考えてもらうことを趣旨とした。第3問全体の正答率は54.80%で、標準的な難易度となった。

労働は政治・経済や現代社会でも頻出のテーマだが、そこで主に問われるのは労働に関わる法や経済の制度や政策である。それに対し、本問では労働の意味や価値という倫理ならではの問題を受験者に考えてもらうことを目指した。特に、資本主義と社会主義の基本的な考え方について、いくつかの身近な事例を手掛かりとしつつ、労働の西洋近現代思想史の観点から、日常生活における労働の意味を理解してもらうことを主眼に置いた。

問1は、宗教改革に関する知識を問う出題である。宗教改革は倫理では頻出のテーマだが、対抗宗教改革との関係もふまえて考えることを意図した。標準的な難易度の問題となった。

問2は、資本主義を批判した思想家に関する知識を問う出題である。思想家とその思想の関連についての正確な理解を問うたが、ドゥルーズとガタリに関する選択肢を誤りと判断した受験者が多く、正答率が21.90%の「難問」となった。ドゥルーズとガタリは教科書記述が乏しく、受験者にはややハードルの高い出題になったと考えられる。

問3、4は、知識理解と資料読解を併せて問う出題である。問3は、スミスの共感論と労働論が相互に関係していることを問う意図があった。スミスの思想に関する知識だけでなく、資料の文章に合致する具体例を読み取る必要があるように工夫して作問したが、結果として正答率は高かった。また問4は、ヘーゲルの労働論に関する設問だったが、資料の読み取りが比較的容易だったことから、正答率は問3と同様に高かった。

問5は、社会民主主義に関する知識を問う出題である。ベルンシュタインやフェビアン協会に関する教科書記述は豊富であるにもかかわらず、オーウェンとフェビアン協会を混同した受験者が多く、正答率は39.91%とやや低めの結果となった。

問6は、ポパーの科学哲学と社会思想に関する知識を問う出題である。ポパーに関する教科書記述は少なめであったが、標準的な正答率となった。労働との関わりで、ポパーの社会思想についての正確な理解を要求する点で難易度の高い設問になることを意図していたが、受験者にとっては比較的取り組みやすい問題だったようである。

問7、8は、大問の趣旨に沿った設問である。問7は、教科書には登場しない思想家（イリイチ、キテイ）の資料を読み、資料の内容に当てはまる具体例の正誤を検討するという、倫理的な見方はたらかせた応用的な思考の力を問う出題とした。問8は、会話文とノートの読解を通して、教育現場での労働の意味も考えてもらえるように工夫して作問した。いずれも正答率は標準的であった。

第4問は地域社会の役割とその重要性をテーマとする。地域社会というと、今日では肯定的に語られることは少ないが、コミュニティの基礎的な単位であり、基本的に人はそれとの関係を避けて生きていけない。この点を踏まえ、本問は外国にルーツを持つ子どもたちの教育を例に、どのようにして社会は困難に直面している人びとを包摂できるのかを考えてもらうことを趣旨とした。別言すると、広義の社会的弱者を前にして何ができるのかを問うことが目的であり、それに応じて、リード文・会話文、資料、各小問を配置した。

各設問については、上述の主題と関連した出題になることを意識しつつ、共通テストで求められる資質や能力を問うことを目指し、現代社会の諸課題、青年期の心理、現代思想の各分野をバランスよく出題することを心がけた。

なかでも以上の趣旨と関係が深い問題として、問5、問6、問9が挙げられる。

問5は、日常生活における見知らぬ他者との交流をテーマとした心理学実験に関する説明と結果

を示すグラフを提示し、与えられた情報を元に論理的に思考し、判断する能力を問う問題である。一連の情報を整理して提示するとともに、受験者が単なる数値の読み取りに終始せず、結果の意味を考察できる設問となるように留意した。心理学実験の問題として意義ある出題ができたように思われる。

問6は、記憶について述べた社会学者のアルヴァックスの議論を資料として提示し、思想的な文章を読み取り、論理的に思考する能力を問う問題である。アルヴァックスの知名度は高くないが、丁寧に資料を読解すれば適当な選択肢を選べる問題とした。

問9は大問の趣旨に即して、リード文を踏まえ、会話文を読み取りながら思考する能力を問う問題である。この種の問題では例年、正答率が高くなる傾向にあるが、昨年度に引き続き本年度も正答率は標準的な範囲に収まり、大問全体についての理解と論理的思考力を問うという出題意図にかなう問題となった。

その他の問題については、以下のとおり。環境分野の問1、現代思想の問2に関しては、いずれも標準的な知識を問う問題である。これらの問題は教科書の記述自体が薄いですが、些末な知識を問う出題にならないよう努めた。問3は心理学分野の思想家の主張や用語の正確な理解を問う問題である。問4は心理学の知識と資料読解能力を問う問題で、検討時には受験者には難易度が高いのではないかという意見も出た。そのため心理学の知識を基に二択に絞ることさえできれば、比較的容易に正解の選択肢を選べるようにした。

問7は国際平和、問8は家族・地域に関わる知識をそれぞれ問う問題である。問7の正答率はやや低めの結果になったが、これは三つの説明の正誤を組み合わせで問う形式にしたことによる影響であると考えられる。

3 ま と め

今までの委員の経験を全体として共有しつつ、具体的な倫理的諸問題への関心を受験者に呼び起こすような問題の作成に当たった。問題作成の作業においては、部会全体での討議と、多角的に問題を検討するとともに、量的に適正な範囲に収まるように努めた。

その結果、難易度においても、適切な出題ができたと思われる。旧課程での出題は今回で終わるが、旧課程の作問のなかで多くの有意義な経験を蓄積することができた。新課程においてもこの経験を、質の高い作問のために活用することが重要である。